

居合道学科問題 解答

抜きつけについて述べよ

① 居合の生命は抜きつけの一刀にある。

故にその抜きつけは心気充実全力を注ぎ、鞘放れの横一文字の抜きはじめから切っ先が鯉口を放れるまでは“序破急”の速さで行い、鞘放れした一瞬の間に勝負が決まり、相手は倒れているという心構えが必要である。

技術は、技の進歩によって異なるが、最初は“序破急”であるが、奥伝にいたると“急”である。上達の各段階によって大きな違いはあるがいつのときでも柄手（右手）と鞘手（左手）の兼ね合いが重要である。

どちらかが勝ってもいけない。居合腰で、両手の動きが一致するようにするのである。

しかも抜きつけでもっとも重要なのは鞘引きで、この鞘引きをスムーズに行うのである。そして、切っ先三寸が鯉口を離れる一瞬には、全身の気力をそこに込めるのである。

また、刀を抜く前の心が大事で、刀が「鞘の内」にあるときすでに相手を制し、抜かずに勝ちをおさめる心が大切である。

- 序破急(じょはきゅう)とは音楽・舞踊・能・その他の芸能にも用いる三区分で速度では序はゆっくり、急は早く、破は中間。

② 抜きつけは、鞘放れの一刃で、居合の生命とする技であり、次のことが大切である。

- 1 刀を抜く前に相手を制し、抜かずに勝ちをおさめ得る気構えと身構え
- 2 鞘放れまでに仮想敵との間合をはかる
- 3 鞘放れからの一刃は激しく確実にする
- 4 抜きつけた後、なおも残心を示してとどめの切り下ろしへと続ける

気・剣・体の一致について述べよ

① 充実した氣勢で、適法な姿勢で、定められた仮想敵を確実に捉えること。

気分が充分にこもり、安定した姿勢で、刀の物打部で確実に捉えることである。気は斬突の意思、剣は刀、体は足さばきと体さばきをそれぞれ指している。

これら三つが斬突のときに一致して、すこしも崩れない状態をいう。

これらが一致することで、気にも剣にも体にも気力が充実し、精巧な技を抜くことができるのである。

② 気・剣・体の一致とは、剣道および居合道の技能において欠かすことのできない要素についての教えであり、次の三つの要素が同じに働くことである。

- 1 気……充実した気力
- 2 剣……合理的な刀の操作
- 3 体……適切な体の運用

居合道と剣道との関係について述べよ

- ① 居合と剣道は、表裏一体、車の両輪であって、その本来の目的は同一である。

剣道は相互に構えあつての勝負であるが、居合は居ながらにして合わすの術で、いついかな場合でもまたいかなる場所においても対処するものであり、そして相手は仮想敵である。剣道が打ち合いの技であるのに対し、居合は斬る術で、各々手の内が違ってくる。

- ② 全日本剣道連盟が制定している「剣道の理念」および「剣道修練の心構え」はそのまま居合道にも通じ、「剣居一体」と言われるように剣道と居合道は不可分の関係にある。

剣道は抜互に抜き合わせて有効打突をめぐる攻防の技を錬り、居合道では仮想した敵を一瞬のうちに抜き打ちして勝ちを制する技を錬る。精神面でも技術面でも剣道と居合道とは相互に補い合い、「車の両輪のごとき関係」にある。

全日本剣道連盟制定居合 業の名称と想定

一本目 前

対座している敵の殺気を感じ、機先を制してこめかみに抜き付け、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。

二本目 後ろ

背後からすわっている敵の殺気を感じ、機先を制してこめかみに抜き付け、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。

三本目 受け流し

左横に座っていた敵が、突然立って切り下ろしてくるのを鎧で受け流し、さらに袈裟に切り下ろして勝つ。**四本目**

柄当て

前後に座っている二人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の水月に柄頭を当て、続いて後ろの敵の水月を突き刺し、さらに正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。

五本目 袈裟切り

前進中、前から敵が刀を振りかぶって切りかかろうとするのを逆袈裟に切り上げ、さらにかえす刀で袈裟に切り下ろして勝つ。

六本目 諸手突き

前進中、前後三人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の右斜め面に抜き打ちし、さらに諸手で水月を突き刺す。つぎに、後ろの敵を真っ向から切り下ろす。続いて正面からくる次の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。

七本目 三方切り

前進中、正面と左右三方の敵の殺気を感じ、まず右の敵の頭上に抜き打ちし、つぎに、左の敵を真っ向から切り下ろし、続いて、正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。

八本目 顔面当て

前進中、前後二人の殺気を感じ、まず正面の敵の顔面に「柄当て」し、続いて後ろの敵の「水月」を突き刺し、さらに正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。

九本目 添え手突き

前進中、左の敵の殺気を感じ、機先を制して右袈裟に抜き打ちし、さらに腹部を添え手で突き刺して勝つ。**十本目**

四方切り

前進中、四方の敵の殺気を感じ、機先を制してまず刀を抜こうとする右斜め前の敵の右こぶしに「柄当て」し、つぎに左斜め後ろの敵の「水月」を突き刺し、さらに右斜め前の敵、続いて右斜め後ろの敵、そして左斜め前の敵をそれぞれ真っ向から切り下ろして勝つ。

十一本目 総切り

前進中、前方の敵の殺気を感じ、機先を制してまず敵の左斜め面を、つぎに右肩を、さらに左胴を切り下ろし、続いて腰腹部を水平に切り、そして真っ向から切り下ろして勝つ。

十二本目 抜き打ち

相対して直立している前方の敵が、突然、切りかかってくるのを、刀を抜き上げながら退いて敵の刀に空を切らせ、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。

全日本剣道連盟居合十二本についてそれぞれの名称を記せ

- 1 一本目「前」
- 2 二本目「後ろ」
- 3 三本目「受け流し」
- 4 四本目「柄当て」
- 5 五本目「袈裟切り」
- 6 六本目「諸手突き」
- 7 七本目「三方切り」
- 8 八本目「顔面当て」
- 9 九本目「添え手突き」
- 10 十本目「四方切り」
- 11 十一本目「総切り」
- 12 十二本目「抜き打ち」

居合道と剣道との関係について述べよ

全日本剣道連盟が制定している「剣道の理念」および「剣道修練の心構え」はそのまま居合道にも通じ、「剣居一体」と言われるように剣道と居合道は不可分の関係にある。

剣道は相互に抜き合わせて有効打突をめぐる攻防の技を錬り、居合道では仮想した敵を一瞬のうちに抜き打ちして勝ちを制する技を錬る。精神面でも技術面でも剣道と居合道とは相互に補い合い、「車の両輪のごとき関係」にある。

居合と剣道は、表裏一体、車の両輪であって、その本来の目的は同一である。

剣道は相互に構えあつての勝負であるが、居合は居ながらにして合わすの術で、いついかな場合でもまたいかなる場所においても対処するものであり、そして相手は仮想敵である。剣道が打ち合いの技であるのに対し、居合は斬る術で、各々手の内が違ってくる。

居合の流派

- 1 夢想神伝流
- 2 無双直伝英信流
- 3 田宮流
- 4 無外流
- 5 新陰流

(伯耆流、水鷗流、夢想神伝重信流、関口流、大森流、長谷川英信流など)

事理一致

事理一致の“事”は技術、即ち技のことで抜きつけはどうする、斬り下ろしはどうするなど技の形はといったことをいう。

“理”は理論のことである。技の理合を十分に理解して修練を積み重ね、技と理論が車の両輪のように一致して、少しくるいもないことをいう。技の修練ばかりでは単なる刀法となり、また逆に理論ばかりで技の修練を積まなければ刀を自在に使えないものである。

切り下ろしについて述べよ

切り下ろしは、抜きつけで敵に一撃をあたえた後のとどめの一刀で、切（斬）りつけともい、抜きつけと同様に居合の生命とする技である。切り下ろしの要点として次のことがあげられる。

- 1 敵との適正な間合いをとる
- 2 下腹に力を入れ、左手七、右手三の力にて、体をくずすことなく物打ちに力が入るように切り下ろす。
- 3 振りかぶったときの切っ先は必要以上に（水平よりも）下げない
- 4 切り下ろした後も、適法な姿勢でじゅうぶんな残心を示す

居合の残心について述べよ

敵を倒した後も油断をせず、敵のどんな反撃にもただちに対応できる気構えと身構えを示すことが残心である。居合では、常に気も体も充実させ、倒した敵ばかりではなく他の敵の四方八方からの襲撃に供えていることも大切であり、居合道の修練上残心は特に大切なことである

居合の目付けについて述べよ

目は常に平静で、目を凝らしたり、まばたきなどせず、目の前を注視することなく半眼に開き、遠くの山を見る気持ちの目付け（遠山の目付け）が大切である。座ったときの着眼は四～五メートル先の床上、動作中の着眼は仮想的の面の中心、切り下ろしたときは倒れた仮想敵を見越したところとし、八方に心眼を注ぐようにする。

居合の間合について述べよ

間合とは双方が向かい合ったときの距離を言うが、相手との心の関係から生ずる時間的なもの、空間的なものを含めて間合と言っている。

間合を相手から遠く、自分からは近くなるようにして勝負するのが間合のとり方の妙味である。剣道では一足一刀の間合が基本であるが、居合では相手をじゅうぶんに引きよせて「近い間合」で抜きつけ、切り下ろして倒す。この間合は、仮想敵のおきかたに関係し、修業する者がそれぞれに修練してつかみとるものである。

守・破・離について簡単に説明せよ

守・破・離は修業段階について示したものあり、居合道や剣道ばかりでなく他の芸道の修業や人生における生き方にも通じる教えである。

1 守

指導者の教えに従って、正しい基本を修練し、身につけること

2 破

「守」の段階で学習したことだけにとらわれずに、それぞれが工夫をこらし、自分にあった技術を作り上げること

3 離

「守」「破」といったことにとらわれず自由自然に行動し、それが理にかなっている悟りの境地にいたること

鞘の内（中・うち）とは

居合道では抜かずに敵を制することが大切とされている。つまり争わず傷つけず、殺さず、生かすという教えで、これはすべての武道にも通じる。特に居合道では、抜くことは最後の最後の手段とされ、抜いたら一撃のもとに倒さなければいけないとされている。そのため居合道では抜かずに敵の殺気をおさめることが重要視されている。それが「鞘の内」といわれることで、抜かずに敵を制する、争わないということである。

気位について

気品ともいう。居合道ではこの気位が技の内容に大きくかかわっている。単に斬ればいいというのではなく、その技から発せられる気位、気品というものが重要とされている。居合道は仮想敵に対する技であるが、そのなかに心が存在していなければならない。その心が気位といい、高段者になればなるほど心のあり方が重要視され、単なる刀法ではなくなる。内から湧き上がるような心のあり方がその技の内容を高め、より深いところへ登ることができるのである。